

居守天神の

古文書について

会員 岩本 勝

はじめに

標題については辯浜郷土史会が昭和六二年に刊行した「ふるさと櫛浜」の資料蒐集の過程で、居守天満宮に関する調査研究中次のことがわかった。

① 「徳山市史」下巻に、居守神社創建年月不明、旧号居守天神、遠石八幡宮の末社とある。

② 「防長寺社山来」には、大島居守天神について、神主古本宮内は延享三年（一七四六）寅ノ十一月卅日、井上武兵衛に対し次のように報告している。

「……青丞相筑紫御左遷の節、延喜元年十月三日此処え御船懸り暫時御滯座被遊……」

- ・縁起は天和年中に紛失。
- ・御宝物は古いものはなし。

・藩主元次公寄進の詩歌がある。

③ 「都濃郡誌」（大正一三年（一九二四）五月廿五日）

大華村居守神社の項に「本社は一に居守天満宮と称す大宇粟屋の居守にあり……道真公西海左遷の時……船人櫓を捲きて席に代へ安坐せしむ因て、網敷天神社とも稱すと口禱の伝ふる處なり……」とある。

④ 「大華案内」（田中雪山著 昭和二年（一九二七）十一月刊）には居守天神について相当詳しく記述しており、元次公の献詩歌の一部並びに居守八景が記載されている。従って著者は後述する古文書の現物について、充分日を通していたことが想像できる。

以上が居守天神に関する文献であるが、前出の古文書に次のものがある（所蔵者 徳山市大島居守一四 磯崎博之氏）。

・居守八勝

・元次公の奉納書及び飛驒守使者持参詩歌二十四首

・網敷天神起元略記

以下これについて解説加筆したものを紹介したい。

(1) 居守八勝 (写真①)

居守八勝

天拜嶽

危峰臨鏡海 瑞靄鎖峰嶽

一自管公想 長留天拜名

牧崎峰

牧崎山勢峻 奇障碧崔嵬

應是隱棲地 白雲自去來

梅核石

飛來一梅核 化石見天工

不爲驚濤轉 確然蒼海中

深江月

素秋深浦月 影入綠波清

歛乃歌而廻 片舟帶霧行

宮州松 (一名九里松)

九里重々翠 清標摩半宵

忽聞風籟起 不弁柳洲潮

妙見山

鸞嶺高千仞 紫宮接大清

神灯輝闇夜 恍見斗星明

平田雁

黃雲收穫富 返照數椽煙

一陣飛鴻影 聯翻落暮田

蛩窸煙 (あまのかまどのけむり)

画野分経界 鹵鹹開海涯

漉沙人若織 烟隔幾千家

田 田

東武 牛山箕麿書

この詩を読む時、今尚天拜山より東を眺めて古跡の残つた姿が偲ばれる。

注①峰嶽(谷)峰と山

②奇嶂 奇にしてけわしい山

③崔嵬 山に石の突き立ちたるさま

④天工 自然の工

⑤驚濤 大波

⑥素秋 秋

⑦歛乃 舟唄

⑧清標 清い梢

⑨半宵 空

⑩紫宮 宮

⑪大清 天の異名

⑫斗星 北斗七星

⑬聯翻 早くつづく様

⑭ 西野 すじをかく

⑮ 函巖 十海の塩

⑯ 澁 砂をこす

(2) 元次公の奉納書及び飛驒守使者持參詩歌二十四首

奉納 (写真②)

天神靈前

茲處^{コト}篤^ツ居守 網敷自在神

隱憂^{カク}無失沈 崇信詩文醇

蒼蔚^{ソウ}梅松地 寂寥沙浪濱

威靈垂學力 快我日增新

從五位下大江朝臣

毛利飛驒寺 元次 敬白

同 同

奉納 居守天神詩歌並序 (写真⑤)

若稽古

昔右相公才德文章超倫拔群愚夫孺子之輩亦無不知其聲明
載在口碑誰不追慕感嘆乎物換星移今丁八〇〇年忌景也。

于茲 飛州大江元次使君管内防州大島之中自古有菅祠号
居守天神使君賦梅詩二首且使臣僕十一人各徵詩歌二首合

使君詩成二十有四首又添薩天錫天滿宮詩一首措之於卷頭
總數詩至二十有五首而大成也書之軸之恭于蒞靈前些以当

幣白者也時維元祿壬午(一七〇二)二月二十有五日日也

天満宮 薩天錫

無常說法現神通 千里飛梅一夜松

万事夢醒雲吐月 觀音寺裡一聲鐘

白梅 元次

妙約東風會意存 梅花^ハ的^ク皞^ク表^ス前^ノ垣^ニ

清容如在一株玉 雪^ハ作^ル肌^也氷^作意^也

梅迎客 同

江南^ハ笑^ハ物^映分^明 行客^託情^修旧^盟

在昔羅浮林下暮 淡^妝素^服襲^人迎^客

禁中梅 次 恭

春の世の里の林のそれならで

雲井の庭に咲くる梅がえ

依風知梅 同

真木のとのささでぬるよの手枕に

吹きくる風の匂う梅が香

野梅 方 直

拔俗孤標絶俗縁 未^レ陪^レ内^苑玉^皇前

韜光晦跡遠朝市 窃^レ比^レ昔^時莘^莘墊^賢

庭梅

同

約束清風疏影微 化工彫琢見珠璣

梅花樹下芝蘭宝 不覺暗香薰染衣

月前梅

光 靖

春の夜の月の光の梅が香も

重ねてうつす袖のせばきに

梅花薰衣

同

みる人の花のたもとも苔衣

春はひとつに匂う梅が香

檐梅

友 直

疏影掩檐月下明 暗香浮动透書棚

可憐彼有伯夷志 一樹風流千歲清

松間梅

同

松作主翁梅作賓 蒼髭縞袂両精神

古今不改歲寒釣 莫逆生涯避世塵

紅梅

常 治

ながき日のあかでぞ終にくれないの

色香ことなる梅の木のもと

梅移水

同

ちらぬ間も花の鏡やくもるらん

梅咲き匂う谷川のみず

夜梅

隆 広

和月観梅吟興長

参差枝上点瓊瑠

夜明珠觉花幽艶

一枕清風入夢香

窓梅

同

清曉傍籬茶蕊開

暗香疏影入窓来

風標若被陶潜識

豈癖菊花却癖梅

梅有佳色

專 遊

色も香も心にこめて梅の花

あかぬかざしの袖につつまむ

梅盛

同

ふりし時咲きものこらぬわが宿の

軒端の梅の花の色香を

路梅

西 船

梅腮施粉太清奇 佳麗香凝氷雪肌

多少行人過不得 暗怨掃路对幽姿

梅風

同

超二越百寿傲氷霜 艶色瓊姿不可当

柔々従来儲萬斛 任他風度散清香

夕梅 直信

花の色もひとしく匂う月影に

夕闇しらぬ梅の水のもと

里梅 同

袖枕うさもおもはじつらしとは

いわでの里の梅のしたぶし

江梅 玄玲

江梅不眉帯風霜 瀟洒氷姿現淡粧

倒影玻璃波欲湧 篙工微笑臭清香

溪梅 同

玉骨苦心自不羸 歲寒全節吐清香

古人漫說賤馨事 喚傲花中真隱君

籬梅 (まがきの梅) 直純

遠きよの神の思もみずがきの

久しく匂う春の梅が香

梅交松芳 同

枝交わす軒端の松にならばなむ

梅の匂いし千代のゆくすえ

飛州侯人江元次於其管内防州都濃郡居守天満

宮修八〇〇年祭会奉幣白献詩歌余聞其盛
事謹作律以表述忱昔日曹國金忽夢儒
林技粹入槐門五代文藻奉名連三代榮華御
製存藤曼北家揚波浪梅飛西府託幽魂清
涼雷霆漫虛説唯拜衣香不忘恩

元禄十五年壬午秋

朝散大夫国子祭酒藤信篤拜

圖 圖

周防都濃郡徳山莊居守社者所祠嘗相公之靈
地也昌泰四年之春相公左遷大宰権師之時
暫宿乎徳山莊之民家館人覆春敷繩以為御
座公曰居此所而長可守此人也爾後点
其地以為社号居守社乎前海後山華表霜古
松梢風高白棉之幣青蘋之奠洋々如在焉
想大神在天下者如水之在地中也公雖薨
平太宰府精神無処不在焉過化存神之妙果不
可誣焉元禄壬午二月二十有五日正当八〇〇
年之忌辰於是太守人江元次君修祭奠献詩歌
遂請国子祭酒林子林子乃作詩以寄之大
乞余記此事僕不材譏劣不堪応求不能

峻拒^①漫^②據^③所^④聞^⑤以^⑥繼^⑦卷未^⑧云^⑨尔

元禄壬午（一七〇二）秋庚申

源隆紀謹記

元禄十五秋把^⑩瓢^⑪于^⑫武江

池庵佐玄龍

印 印 印

注 ①陰憂

痛み憂える

②奮蔚

盛んに繁る様

③使君

君の為に使用する者

④現神

菅公

⑤妙約

妙にしてしなやか

⑥会意

心になかう

⑦的瞭

鮮明なる様

⑧美物

梅をさす

⑨淡妝

あわいよそおい

⑩芝蘭

香草の宝の様だ

⑪檐

梅の木

⑫彼

梅

⑬主翁

主人

⑭賓

客人

⑮蒼

松

⑯縞

梅

⑰販素釣

困窮の時利慾を以て誘う

⑱瓊瑠

美しい玉

⑲苓苾

美しい花

⑳癖（一賞）

賞す

㉑梅腮

梅の顔

㉒玉骨

梅の異名

㉓賤攀

人まねをすること

㉔連忱

まこと

㉕儒林

学者の仲間

㉖槐門

大臣

㉗青蘋之奠

うき草の供物

㉘過化存神

聖人の徳化の盛んで至らぬ所なき義

㉙誣

いつわる

㉚国子祭酒

国子学の長（昌平學長）

㉛謗劣

あさはかにして劣る。才学浅くして人に劣ること

㉜漫據

そぞろに述べる

㉝云尔（爾）

しかいう

③ 把帆

たばねてかく

④ 池庵佐玄龍

佐々木玄龍。号池庵。江戸の人。書体

家として鳴る。享保七壬寅（一七二二）

二月二二日没

(3) 防州都濃郡相島山居守浦綱敷天神起元略記

(写真③)

防州都濃郡相島山居守浦綱敷天神起元略記

抑居守綱敷天神と申し奉つるは往昔菅公延喜元年二月中旬
筑紫え御左遷のみぎり風はげしく波荒くして、この浦え船
を寄せ給う時に漁夫一人尊敬し、我が家に伴い船の綱を廻
し縁座となし請じ奉り、波とけの鬱懷を散ぜしむ。菅公こ
覽遊はされ此の地は西の山に滝あり松滝という。浦を整浦、
沖の干瀉に瀬あり梅ヶ実という。お船のかかりし処を磯が
尻、至つて景地なり。菅公御眺めありて後風やみ波静かに
して、お船出帆の節お名残を惜しみ給いて漁夫に誓いて曰
く。我筑紫にて身は隠れるとも魂は来たり守らんと約せ給
いしより地名を改め居守と名付け、夫より三田尻勝間の浦
に着帆ありて、周防の国司土師信貞御同姓に殊に近き御血
縁によつて俯殿に宮市松ヶ崎に跡を垂れ土師信貞の子孫、
は今の武光氏也
筑紫え御下向の後延喜二年二月五日太宰府安楽寺に薨じ給
う。歳霜移りて百七十四年の後承保元年甲寅此の浦の郷士

村井恵茂之丞久勝がある日居守の海浜磯崎にてあやしき石
像を掘り出し、よくよく見奉れば神像なり。何の神という
事を知らず。わが家に伴い棚に供え奉り尊敬す。時に此の
浦に直成山伏一人居住す。有る夜夢中に告げて曰く、吾は
菅神なり。往古左遷の時此の浦に着船す、その時の神魂石
像となりて年久しく地中に居す。村井恵茂之丞に頼り出現
す。ここに祭るにおいては一天泰平、五穀成就、万民安穩
を得せしむべしと正しく告げ給う。山伏驚きて有難く思ひ
早朝に恵茂之丞宅に行き、右の意趣委しく物語る。恵茂之
丞驚て我此の内海辺磯崎にて怪し石像を掘り出す、なんの
神とは知らず。されども棚に供え尊敬す。さては天満宮に
てありしかと崇めたてまつり子孫に長く伝えんため村井を
改め磯崎と改名す。これ磯崎にて神像を掘り得し故なり。
此の事捨てがたく領主へ訴え此所に祭るべしと山伏より早
朝注進す。領主不思議に思ひ神像を礼拝ありて尊敬しま
し御社造営あり。成就の上祭事など執行、寅年出現の由緒
をとりて廻る寅年毎年祭りに相唱え今に至るまで祭時執行、
御社は時の国司領主より仕覆等御悩みにて、当時毛利家様
に移りて徳山より御社再建相成仕覆等の御悩み等仰せ付け
られ候。中古俗休等神事執行候こと神威を恐れ、社人一人
御居成られ候様お願ひお許し相なり当家屋敷内古本宮内と

申す社人居置き神祭調い候。御社造宮の節は上遷宮下遷宮共神体を守り奉り、開帳の節御戸を開き候事は今に当家より相勤め候。此の神像信仰の輩は火災病難不祥を遁れ家内安全諸願成就その靈験新なる事いちしるしきものならじ。

誠恕謹志 圖

月 日

付記 この稿をなすにあたり西郷道胤氏のご指導をうけ

たことを感謝します。

(平成三年二月九日例会発表)

参考文献

防長寺社由来

書画鑑定 大日本名家全書 (明治四三年刊)

太華案内

都濃郡誌

徳山市史

育英館二代館長波田兼虎と

鳴鳳館長本城紫巖・役藍泉

— 須佐とは二百年も前から文化交流 —

会 員 清 木 素

波田兼虎の墓碑は「須佐(佐上)大瀧寺の後丘にある。波田家の祖と一兼因は益田家八代兼胤(兼胤は兼胤)の末子である。泰氏を繼いで益田家に仕え、石州波田郷を領したので姓を波田と改めた。十三世太郎右衛門の時益田氏に従って須佐に移る。十八世重内兼厚は宗学兵学に通じ、増野氏の女を娶って三男四女を挙げた。長子貞父、字は与市諱は守節、幼少より学を好んで諸学に長じ、また京都、東都に遊学して武術にも秀で名声高かったが、不幸にして病を得、いまだ家を継がずして宝暦五年四月二十七日没、享年三十才。

次子兼虎、兄早夭により家を嗣ぎ高山(高ノ山)(字は子(子))熊(熊)といった)と号す。幼くして兄とともに学を修め、十六才萩明倫館山根華陽に師事し、特に儒学・国史・詩文・兵学に長じた。宝暦十四年(一七六四)韓使来朝に際し、滝鶴台に従ってその学士と赤間関に於て交歓し、その博学は彼